

翻刻 『敵討猫魔屋敷』

尾道市立大学

芸術文化学部

日本文学科

七期生

有村

惟代

翻刻 『飾磨榻布染』

尾道市立大学

芸術文化学部

日本文学科

一六期生

三好

花純

指導教員

藤沢

毅

翻刻 『敵討猫魔屋敷』

かたきうちねこまたやしき

尾道市立大学

芸術文化学部

日本文学科

七期生

有村 惟代

翻刻 『飾磨褐布染』

しかまのかかちぞめ

尾道市立大学

芸術文化学部

日本文学科

一六期生

三好 花純

指導教員

藤沢 毅

尾道市立大学（二〇一二年、「尾道大学」を改称）芸術文化学部日本文学科には、自主ゼミとして「近世文学原典講読ゼミ」というものがある。これは、正規のカリキュラムの中にあるものではなく、教員の呼びかけに応じ、興味を持った学生が自主的に集まり、活動するものである。当然、出席したからといって単位が取得できるわけではない。

近世文学原典講読ゼミは、江戸時代に出版された読本というジャンルの中からテキストを選び、くずし字で印刷された文章を現代のものに直していく、いわゆる翻刻作業を活動内容としている。くずし字を読む力をつける教育は正規の授業の中にもあるが、それに留まることなく、もっと読めるようになりたい、という意欲を持った学生が学んでいるのである。参加した学生たちは、実に楽しそうに活動する。担当箇所にくずし字がなかなか読めずに苦しみ、辞書をなんども引いては悩み、そして納得できる読み方を見つけて喜ぶ。答合わせの時に、「^{パレフエクト}全て正解」との

評価が下りた際には満面の笑みを見せる。苦しんだからこそ、悩んだからこそ、正解を導き出せた喜びはひとしおなのであろう。そして、こうした活動があつてこそ、真の力がつくのである。くずし字を読む力とは、文脈を考え、文意が通るように文字を選定していかねばならない。これが本当の意味での「読む力」なのである。そしてこの「読む力」は、簡単には身につかない、価値があるものなのである。学ぶ喜びをもって活動し、人間として生きていく上で大切な力をつける。まさに学問の本質であらう。

ゼミで翻刻したテキストは、教員の編集のもと、公開している。また、ゼミで培った力をつけた学生が、卒業論文制作にあたり、自ら一つの読本テキストを翻刻し、研究することもある。それもまた順次公開している。これまでに翻刻を公開したものを以下に挙げる。

近世文学原典講読ゼミで翻刻したものを

『浪華侠夫伝』（二〇〇七年三月）

『犬猫怪話』竹篋太郎（二〇〇九年三月）

『「蚩狩」宇治奇聞』（二〇一二年三月）

『小説東都紫』（二〇一二年三月）

『「皎月菊花」大和物語』（二〇一四年三月）

『「北野靈験」二葉之梅』（二〇一六年三月）

『斯波遠説七長臣』（二〇一八年三月）

『「月花惟孝」』（二〇一八年三月）

『女熊阪隴夜草紙』（二〇二〇年三月）

末田歩さん（四期生）が翻刻したもの

『「復讐奇談」幸物語』（二〇〇九年三月）

大西華織さん（六期生）が翻刻したもの

『夕霧書替文章』（二〇一一年三月）

原田佳美さん（七期生）が翻刻したもの

『「復讐奇談」信夫摺在原草紙』（二〇一四年三月）

村上幸代さん（七期生）が翻刻したもの

『「小夜衛真砂物語」』（二〇一七年三月）

橋原彩さん（八期生）が翻刻したもの

『「念仏塚高砂松」則定仁勇伝』（二〇一九年三月）

本冊子では、有村惟代さん（七期生）が翻刻した振鷺亭主人作の読本『敵討猫魔屋敷』と、三好花純さん（一六期生）が翻刻した岳亭丘山作の読本『磨榻布染』を公開する。

なお、このたびは、お二人の翻刻による二作品を一冊にまとめた。これは有村さんが翻刻した読本の書型が「中本」であり、また三好さんが翻刻したものも小さめの「半紙本」であり、一般的な半紙本に比べ文章量が少ないという特徴を考え、翻刻冊子としてある程度の厚みを作るためである。背表紙に翻刻作品名を入れるためにも、このような措置をとった。

翻刻『敵討猫魔屋敷』かたきうちねこまたやしき『飾磨褐布染』しかまのちぢぞめ

二〇二一年三月三〇日 印刷
二〇二二年三月三〇日 発行

(二〇二〇年度 尾道市立大学
教員個人研究費による)

翻刻『敵討猫魔屋敷』

尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科
七期生 有村 惟代 翻刻

翻刻『飾磨褐布染』

尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科
一六期生 三好 花純 翻刻

指導教員 藤沢 毅 校訂・編集

〒七二二―八五〇六

尾道市久山田町一六〇〇―二

TEL 〇八四八―二二八三―二(代)

印刷・製本 三原プリント株式会社

〒七二三―〇〇四一

三原市和田一―五―一三

TEL 〇八四八―六四―一六四三

(非売品)